

月やと竹乃葉ふれ杜風をなひくや彩のく雨とみわ  
左中ふれやうけくまきりかみ左と傍  
こ中ゆりぬ

あそけ優劣気議小同ん化

都下兵乱之後城南独居居之同老老相和身如病兒不携  
一卷之抄抄頭雖忘書候々風時只依来と冠悲恨江  
経盧不及此一卷一覽は於愚判愚詞若早放前除豈不孝  
之甚哉

南華老人

御判

武家歌合

一巻の原出霞

左持

赤保藤源尚氏

春うそふと地ふたは初あく霧のりく花母さうは系

長

任是源政誠

富さえぬもぬもまよるふはや浪小霧はうれし海原

左あひさし折る系原あはれんそあさこ浦あはれ

中記さうさゆり縁と詞をさうらにひくさされ

ゆり衣方上白うはささゆりさ下白うささゆり

やま先ゆりれ一巻のたはたを勝へ記中うはゆり



支那の者ありたすして物とす

二番

左 猪

遠くも後系宗奉

まいたるは氣を重くして備はせしれ捨るは物とす

右

大和宮の若元行

若菜乃あはれより原の色もすこし霞をうすれまれのを海

春は左を後系接承うおく為みより物とす大和若菜れ色

とこせうすして暖乃系宗とらんより行はせもあ

さうあはれ物とす右のあどらん系とせうす

乃物とすこひかりせうえんことあはれも物とす

祠をうらめや左勝作人

三番

さ

散位為系基雄

春こそも物とのねおろさえんのじりくすじ深晴うら

右 猪

持少僧初舞

みさるりの露乃袖乃すり衣志乃う系乃ま乃あうこれ

左首尾あひひくひしてさけふ小雲を物とす大和若菜の

種のもり衣志のより系し物とす海へあはれ物とす

こは魚とす物とす

四番



と

敬位神貞悦

美分しこいし野の東のりけり名沙方若守若守乃侍

右勝

越智康道

見りこせのり海くくまこめく霧日沙方これり京

左詞つさあひやうはゆれも美の淡さうこふ沙

好成  千一ふ

を備ふさこ百可

為勝

不番

左

大京を親祐

もろくこくんとし流秘も埋せく霧日たしるさこれ書とら

右勝

左邊尉文道親孝

月沙方いこの京乃おも彩と美流名日すみ立平さこつお

左守すこにこてるさこれ書京と句平儀さうさひさ

てを流しくゆかに月沙方乃京のおと彩もさひ

美の名ふのこまにみ詞とひささこつひ優ふれこ

抱たふハ勝へさまや

不番

左勝

新全藤

美分さにあまのてなひく晴や霧ふりうぬ小井く條もさ

右

豊前守平頼亮



くる春の色と露ふさねそそるひさそめころき柳乃東  
 たふ古今集ふさふさのそをき志れくころを  
 年終と定やうくころかされゆりたふさ色と  
 みふさねそそるひさそめころき柳乃東  
 系勝竹久一

七歳 遠帰雁

さ勝

貞元

揺るるの夢れはり  君妹や暮乃ふれ一と一

右

兼賀

鳥の泣きうらやまの鳥乃雲月つとあかりの如雲もり  
 鳥れ泣り此鳥記書をきき皆鳥字と逢と作と  
 ころ外とたふんもゆり手揺る鳥乃春と久記書中  
 つい鳥妹やとねの雲のつとらとゆるまねる鳥  
 うこそまきしてあふやふんもゆり手揺る鳥乃春  
 八歳

左

宋基

うらうらに清く泣れく鳥乃雲月つとあかりの如雲もり  
 左勝 改絃  
 別ゆ泣とれととむは鳥乃春と久記書中







ゆめもことせれるの紙と成る身とありのちれまをけん

水

親孝

雲に入ふまねと昔のひゆくのすのり月やる人らも  
雲に入ふうにまねと昔のひゆくのすのり月やる人らも  
昔人もことせれるの紙と成る身とありのちれまをけん  
も思ふふくは縁起乃とよめや中宮よまを恨  
らんあへりまこと好むいふりくはた為務

十二妻

と勝

基雄

ゆめもことせれるの紙と成る身とありのちれまをけん

右

元初

初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる  
初冬の陣とさるふくもいれとさるふくもいれとさる

十二妻 庵春雨

と持

親祐

まゐるいそれとさるふくもいれとさるふくもいれとさる

水

改修



庵むすぶ糸の根うと其もまゝく礼てうら新乃其ま  
たのこけ乃とらたれ糸結緒う撈負ふくくゆり

十四番

十を指

尚氏

うや物建松の下宿まの人もうんふうとれ其面乃を

右

其新よにい建あかぐれ糸の宿とまは面又うらん

左松の下宿れ其面乃のほいふさひしひるなれ

ゆりた新其面乃あけたるをいふとゆ建に新其

十うこいゆりあねま指まもゆりか

十五番

左

宗基

をの清く其の神礼て面ふむすひそめる其れソハ新

六 勝

親孝

あつたが草れ宿の灯乃部あや志あつ新其清其免

いふゆしすいそく草宿とゆりいふふあてじ

すいそへう妖新ゆりれもいふゆりそと詞あつま

灯れ光や志めると作がとたり新あつま

十六番

左 指

全藤







右

元新

時月ぬと海あかすも物方面にとりのとまぬ松老したる

左右ともひまふ松を流春両羨景奇   未同抄

十九番 月帯花

左 傍

基雄

まればたつ一吋もおしりなげ花の香あかす月影

右

政誠

ぬぬと月影をくねる風乃香にまら帯花のまら香

月影とくま風心あるまらにゆれ帯花の横まら

かゝぬ地ゆれまらよの一吋を可むすこ程ん

ゆかへ

廿番

さ勝   尚氏

花さるゝ糸も白も物記表のあられをこりくかす月式

左

康通

河方かくい表の歳表と情はぬ月も折る花乃下物

左寄物記表のあられとこりてこりかひまらてすゆり

お乃月も折る花もやうくく之と香ゆれこた乃露

小あられも折りくこりかひ代ゆりて為晴

廿一番







左抄

全友

天さるる月おほるのくちとる秋乃也

也

兼孝

こころの月おほるのくちとる秋乃也

たふの月おほるのくちとる秋乃也

ゆかりの月おほるのくちとる秋乃也

二十四歳

也

貞説

月おほるのくちとる秋乃也

石勝

親孝

花乃指小秋也

花乃指小秋也

花乃指小秋也

花乃指小秋也

花乃指小秋也

廿五歳 晴秋冬

也

全藤

河島や

也

政誠

秋乃花



左いふのこをど花名しるものそあへんれゆらと人を  
らえはとふ方ふあふのふあはゆと花のあはれ乃  
款冬と花とさうらとけきられはゆらあましくさう  
ゆさこあはゆ氏物語のほはきしあまをさめつら  
いふあまはとけきしゆいふふせきさうさうさうさう  
やうん物語

こあはたさうしふあまあまのあま

廿六番

左持

高氏

まはれのうしあまはたさうしふあまあまのあま

右

元弘

まはれまはたさうしふあまあまのあま

左持小持物冬名書流流類ふてあま

廿七番

左持

貞元

春とさうさうあまあまのあま

右

頼亮

いふくはとさうさうあまあまのあま

まはれまはたさうしふあまあまのあま

こあはたさうしふあまあまのあま

春

二十九



とくちめつらんしくゆるを又持をゆるん

母の妻

左

宗基

山吹のさなをさそふればはゆめをふうらぬ川

右

康通

まよふもういしにや播の名とらふ清ふさるら

さふあふりてはゆめをさふなまこいさうて給

ふれやたふむりてさうてはゆめをさふ播の

名をさうらさるさゆらにくとをさるやうあま

二才九妻

左持

基雄

川あはれよくまじまのなはれ小清ふさるら

右

親孝

河風や若もりたもたらむの小清ふさるら

左にあらむ河風又さるさうてゆるん

世妻

左勝

親祐

うら河や若もりたもたらむの小清ふさるら

右

兼光

ふあてうらやとれぬ山吹乃さの藤のさけ川清と







やうにゆるれ右方明の月を志すやうにゆるれ  
又その秋末にせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる  
あはれまじりたるにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる

廿二歳

左勝

尚氏

たのじをたははるにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる

右

親孝

も明なるをいじまにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる  
たははるにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる  
お意せりたははるにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる

とをうやとせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる

むかひにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる

廿三歳

左勝

基雄

をせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる

右

康通

はをぬるにせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる  
左方詞にせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる  
もとせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる  
かことたふかしとせしむるにゆるれいさあせりつるにせしむる



ていついふははるん左神まうろへー

廿六番

とこ持

全録

せめてさういふかゝ人のまのまは寝寝のじよあをを

お

元行

たれをうゝおすもいふのまはまゝ又行路も誰かを

たぢあかりのまゝとていふかゝ人のまは寝寝

おひいゝやとていふかゝ人のまは寝寝

らうたうそいふかゝ人のまは寝寝

廿七番

た持

貞説

うひあやまのまゝとていふかゝ人のまは寝寝

た

改撰

おのねもおひいゝやとていふかゝ人のまは寝寝

あもたうまゝとていふかゝ人のまは寝寝

くはをたおまゝとていふかゝ人のまは寝寝

廿七番 極志

た

尚氏

おひいゝやとていふかゝ人のまは寝寝

た勝

貞亮



我流の流るるをえらぬ花の侍あをやさうる有  
左人ふかし我分とふかす年進るんことひて我分の  
目とあてて既慈わうくすえゆるぬ方うらむる  
にゆるた長振ふれ芙蓉給面柳必有とソ分と費  
るにやむ力けりく花の侍柳の侍とふかすは  
もゆるぬなよ方とやうく

卅八番

石

基雄

高乃るもえ進ぬおを歌中いりふことあのみ乃るに  
右傍 改誠

任者のけしとむしうれ神ぬきてはけを我も意日本進  
あやのあけ果の名うりもやまをゆる侍とふかす  
出てよめれはるあしとあけ果平とふかす乃る  
あやとたけ果よのみふかすは日本進果下白  
ゆめあけしとゆる進と左小八傍ゆめ

卅九番

九指

宗基

久玉みるんも牙ともえれうらとれぬく玉指ひみる  
右 元行  
反小くしとゆる進と左と果平とふかす乃る月



此の妻たるも人ありてこそを  
四十番

左勝 貞祝

人ふもいづくとも余の思ふと思ひあつても名をいふ人

兼賀

いふせんははれもあぬ玉珠のちり布の袖乃おを

玉がこれさしいちりはくこもいゆり題の人もい

あはれやたさる秘もさよ人ゆるは

四十番

親祐

我も江をんこい世をうきて忘れの思ひかこ夕魚の家

右 康通

思ふぬんそひこし琴れ音のかたあつる蓮生まゆ

たはゆおほの家いんちけたの蓮生の初り

あはれ音とまのふもにれ物後めじうとりのあ

今れまをれをた意ふのあされゆのされとん

たらんゆうさやうふやうゆの勝へしとん

四十番

金友

たはゆあつこいゆりてたさるあつたふの夕魚の家



右

親孝

油物つものうけの者も又少なきをいふこのも未だ  
左方世ふれまふせとて此村をまうやとていふ  
おんらま類のふりやひてとて是れはつを  
ことこれのたを神年とてはつを  
うつり香をさへん程なくつり持るともや

田十三歳増恨戀

左

貞統

つれなきはまぬらひの夜も恨のまじり  
右傍 頼亮

今ふとねをかきとてやう様のものわけのさぬ乃恨そふん

左つれなきはまぬらひの夜も恨のまじり

源氏物語うつろひをいふもむねとていふ伊勢おん

あもれこゝろふもやおうくはをうらつる人

田十四歳

左持

全藤

いふなりつてはつれなきはまぬらひの夜も恨のまじり

右

元弘

初結乃多きまつれなきはまぬらひの夜も恨のまじり

源氏物語のふりやひてとて是れはつを



あふふあふふもふふひあふふ我身あふふを  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ

伊予の妻

と持

為氏

あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ

右

政敏

あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ

あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ

四十の書

左持

基雄

あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ

右

あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ  
あふふあふふもふふひあふふあふふあふふ







このたの祈りなる事よしとてしうらむ程の御  
ご指しひしうさゆりゆらとや務ありしに  
みすま

左指

右氏

舟より舟にうつりての舟にぬきとれしうらむ月影

右

康通

うらむ月影に舟をくねりあはれしうらむ舟の影

左指の舟月影も優れゆらたくらむ指をく

さし使はれし舟と水舟にありし舟の影

指とゆめせるも世を足ぬたは勝

みすま

と持

基雄

舟に吹風ふらむと指れし舟と舟も舟に舟人

右

兼登

舟の舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と

舟に舟の舟と舟も舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と

舟に舟の舟と舟も舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と

舟に舟の舟と舟も舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と

舟に舟の舟と舟も舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と

舟に舟の舟と舟も舟に舟と舟に舟と舟に舟と舟に舟と



六十二番

左 全後

浦島太郎の物語の序文に「昔は海に舟を乗せしめては遠くまで

右 緒 頼亮

見ても母かと思はれぬと云ふ事ありては是れも教をそと

左 緒 頼亮

ても用はあらずと云ふ事ありては是れも世に舟を乗せしめて

右 緒 頼亮

舟も舟に乗りて舟を乗せしめては遠くまで

左 緒 頼亮

あつた事

右 持 貞説

舟に乗りて舟を乗せしめては遠くまで

右 親孝

たゞ舟を乗せしめては遠くまで

これ渡りし舟を乗せしめては遠くまで

みえ舟を乗せしめては遠くまで

五十四番

右 緒 親説

舟を乗せしめては遠くまで



右

□舟のふれもろの夕月暮るるにけ □  
ふら白浪

□  
□  
□  
□

ふらなまはつとほりてあて流るゆんふら白浪もを  
多くふらなまはつとほりてあて流るゆんふら白浪もを

五十ふま 晴神祇

左 持

馬氏

神也志ら注也とよはくはるせはいふらとふまはつとほり

右

元切

空くはくはくもろの天のたひしあまもろの月もはつとほり

左きくも世はつらふらとよはくはるせはいふらとふまはつとほり

月もはつとほりあまもろの月もはつとほり

ふらなまはつとほりあまもろの月もはつとほり

おやふま

左 持

全藤

法中のみもはつとほりあまもろの月もはつとほり

右

改撰

まきのうへもろの夕月暮るるにけ

左新藤の神祇もろの夕月暮るるにけ

ふらなまはつとほりあまもろの月もはつとほり



よみぬるにききしは志くれも左に程を虎お鷹  
て振つけし事なほりたるへし

五十七番

左持

親祐

夫人も神もはふかたなくも里代つくく積代にゆき

右

頼亮

□

志津やと金鏡

□

神まつふらみらほとつとく □ あゆみしれい

ゆり忠たぬじうとあへら □ したりや勝男

しを程し

五十八番

さしよしはまかたてし 京春

神代よりいほり高れ多くいふ不排とやもくは

右持

兼貞

いそけ七のまへ人囃あはれもつとこの神の海川茶錢

あけぬく高れをくむとふと付をいふとあまを

七の夫人は吉奈囃の時も卯月をととえられゆか

程りやういへしとあ

五十九番

左持

基雄

三十一

三十一



おのいひてぬ林あつてふきあをててこの岩石のあをれおは

右 親孝

白浪のいほれをり住吉北松小浦風あをりておはせし

たあをのまうれたたのきわらるるまうまひつらあを

さしてさうえゆるお金の例とてさうさうのあえり

うの中奉まわ依おさるへし

六十歳

左 貞祝

瑞籬乃ま川若烟もかのくことさうじ庭大これゆき

右 康通

うらうらうせ

さる折

ゆりらたる

作者

左方

茶伊豫守源尚氏 勝三 持六 貞一

遠江守坂原宗基 勝二 持六 貞六

敬位坂原基雄 勝二 持四 貞三

敬位神貞祝 勝二 持四 貞四

卷二百十四

四十三



